

海老 洋 日本画展

シカイノハル—四海春

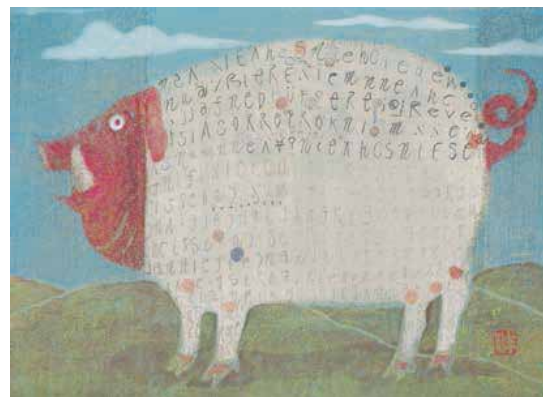
【会期】 4月24日(水)~4月29日(月)
 ※最終日は午後5時閉場
 【会場】 日本橋三越本店 本館6階 美術特選画廊
 中央区日本橋室町1-4-1
 ☎03(3241)3311

えび・よう

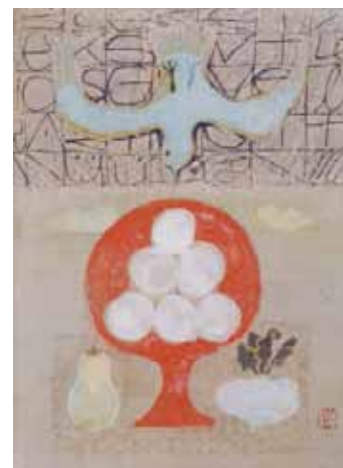
1965年山口県生まれ。95年東京藝術大学大学院美術研究科博士後期課程美術専攻単位修得退学。2002年春季創画展賞(同03年)。03年創画会賞(同05、06年)、文化庁新進芸術家国内研修制度研修員。06年創画会会員推挙。07年東京藝術大学美術学部絵画科助教(〜08年)。09年広島市立大学芸術学部日本画専攻准教授(〜14年)。14年広島市立大学芸術学部日本画専攻教授(〜16年)。現在東京藝術大学美術学部准教授、創画会会員。



「四海ノ春」 20号



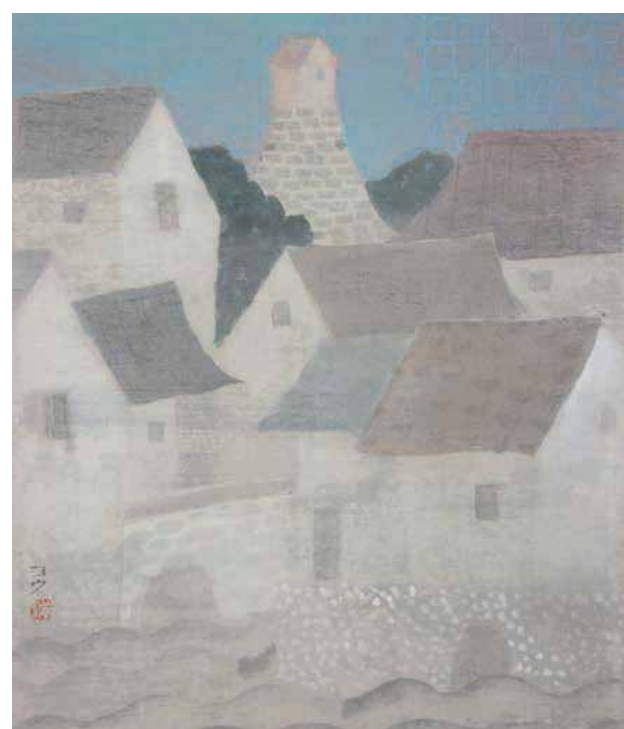
「オカノケモノ」 4号



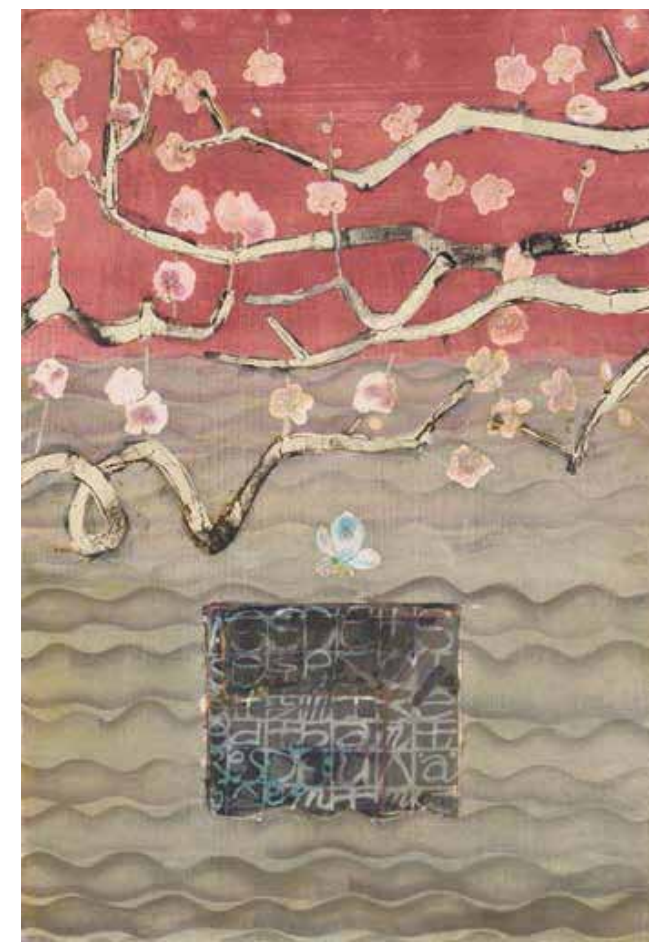
「盆ノ上・フクトリ」 4号



「イツモノ海」 10号



「水路の町」 10号



「ウメトウミ」 15号

四海を辞書で引くと「四方の海」、「天下」、「国のまわり」、「四方のえびす」、「須弥山のまわりをとりまわっている四つの大海」など出てくる。須弥山とは古代インドの宇宙観で世界の中心にある巨大な山のことである。続いて用例として「四海波静か」であれば、四方の海が静かなことから転じて、天下がよく治まって平和なこと。「四海兄弟」であれば、世界すべての人は皆我と同一人類で、兄弟のように親しく、親疎のわけへだてがない。さらに謡曲・高砂の一節として、祝言の席で謡われる次の大変めでたい曲が出てくる。

四海波静かにて
 国も治まる時つ風
 枝を鳴らさぬ御代なれや
 あいに相生の
 松こそめでたかりけれ
 げにや仰ぎても
 事も疎かやかかる代に
 住める民とて豊かなる
 君の恵みぞありがたき
 君の恵みぞありがたき
 今展のタイトルは四海春だから、天下はあまねく春である、という意味になるだろう。作家の造語なのだろうが、清々しい晴天の日、湿った草と土の香りを運ぶ風が桜の花びらを空に遊ばせている。心地よく仲間と酒を飲みながら、それを眺めているような情景が浮かぶ。本人は「とてもおめでたく、このうえなく長

閑な感じがします」と図録に書いている。静かな心に喜びが溢れてくる。
 海老洋は東京藝術大学で日本画を学び創画会を中心に活動しながら、個展やグループ展などでも発表している。同時に広島市立大学で教鞭を執っていたが、2016年からは母校の東京藝術大学で准教授として後進の指導にもあたっている。故事から引用したような世界観の中に、脱臼させたような素朴さと、ユーモアのあるデフォルメで描かれた、飄々とした画面が面白い。周囲あまり頓着せずに内的宇宙で遊んでいる。

古代人が世界を認識するときには、実際に自分の目で見た記憶を基礎として、伝聞や他人が壁面に残したイメージを膨らませ、より大きな世界を空想したのだろう。それは自然と理想郷を生み出す。そのようにイメージする力を現代に生きる海老は持っていて、外部からの情報を内的世界に落とし込み、時間を掛けて育てながら、フォルムの輪郭を取っているように思う。独特の洗い出し技法がイメージが熟すまでの時間を生み、鑑賞者が共感できるまで作り込むことができる。約20点の新作を発表する今展は、忙しい日常を忘れ、じっくりと時間をかけて鑑賞して欲しい。
 (編集部)